

令和元年6月18日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26284018

研究課題名(和文)近代日韓の洋楽受容史に関する基礎研究 お雇い教師フランツ・エッケルトを中心に

研究課題名(英文)General research about the history of the reception of Western music in Japan and Korea - with a focus on the German teacher Franz Eckert

研究代表者

ゴチェフスキ ヘルマン (Gottschewski, Hermann)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：00376576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,000,000円

研究成果の概要(和文)：日本と大韓帝国・朝鮮の近代洋楽受容史に貢献した音楽家フランツ・エッケルト(1852-1916)の全体像を目指し、従来の研究をまとめた上に多くの新しい歴史資料を見つけ、生誕100年記念に展覧会で紹介し、その成果を報告書(印刷物)にまとめた。その中で新しい研究成果として特記すべきことは、(1)エッケルトが来日する以前の経歴について多くの誤認を訂正し、新たなドキュメントを多く発掘したこと、(2)エッケルトが日本で合唱団の指揮者として活躍していた事実を発見したこと、(3)エッケルト家の東京での私生活と(4)帰国後来韓前のドイツでの活動についての新たな事実を多く明らかにしたことなどである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近代アジアの音楽史において西洋音楽受容史が中心的な役割を果たし、またその初期段階においてはフランツ・エッケルトが重要な人物である。彼の人生について明らかになっていなかった大きな部分が明らかになり、また先行研究の誤った見解を多く訂正できたのは重要な学術的成果だろう。エッケルトはこれからも欧米(特にドイツ)とアジア(特に日本と韓国・北朝鮮)の交流で注目されると思われる人物なので、この研究は国際交流においても重要な役割を果たすだろう。

研究成果の概要(英文)：In this research we tried to give a comprehensive overall view of the musician Franz Eckert (1852-1916), who is known for his contributions to the modern history of Western music in Japan and Korea. A great number of errors in previous research about Eckert were rectified, and a lot of new historical documents were found and used for this research. The results were presented in an exhibition on the occasion of his 100th birthday and a printed research report. The most remarkable new findings belong to the following four topics. (1) About the life of Eckert before he arrived in Japan, a number of misconceptions were disproved and new historical material found; (2) Eckert's formerly unknown activity as a choirmaster was discovered and described; (3) many new facts about Eckert's private life at Tokyo and (4) his activities between his stays at Tokyo and Seoul were found.

研究分野：音楽学

キーワード：フランツ・エッケルト 軍楽隊 宮内省式部寮雅楽課 東京合唱協会 音楽取調掛 洋楽受容史 明治期 大韓帝国

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

従来より、アジアの近代化における「お雇い外国人」の役割が注目され、これまでに、分野を超える学際的な規模<sup>1</sup>でも、各分野に集中した概観<sup>2</sup>としても、また特定の人物にフォーカスを当てる伝記的なアプローチ<sup>3</sup>によっても、お雇いの研究実績が存在していた。その中であって、フランツ・エッケルトは多少言及されているものの、そのほとんどが別件の研究の副次的研究成果を集めたものとしてであって、エッケルト自身を対象として体系的に行われた調査に基づいた研究によるものはほとんど存在しなかった。この問題を象徴的に示すものは野村光一著『お雇い外国人 音楽』である。この著作にはエッケルトについて 19 ページに渡って書かれているが、そのほとんどが東京音楽学校での活躍についてである。これはエッケルトが 35 年お雇い外国人として活躍した期間の中で一割も占めない僅か 3 年間のことである。35 年間アジアで活躍したという、他の分野でも珍しい、音楽では戦前ほかに例を見ないエッケルトの事例がそれほど注目を浴びなかったこと理由は様々挙げられる。学際的な研究においては主に政治、学問、経済が注目され、音楽はマイナーな分野として扱われてきたこと。音楽研究においてエッケルトが一番貢献した軍隊の音楽が比較的閑却されていること。エッケルトの生涯の特徴である日韓にまたがった活躍が洋楽受容史において今まで注目を集めてこなかったこと。エッケルトが(楽譜資料が豊富に残されているものの)文章として残した資料が少なく、歴史研究の方法では掴みにくいこと等である。結果的に、エッケルトのイメージが他のお雇い外国人よりも薄くなっているのが現状であった。これは、エッケルトが日本の国歌の旋律を選定し、今日なお演奏されている編曲を施したこと、また大韓帝国の国歌(『大韓帝国愛国歌』)の創作に関わったことなどの業績を考えれば、残念なことである。

総括的で体系的な調査に基づいた纏まった唯一の研究として挙げられるのは中村理平著『洋楽導入者の軌跡』(1993)におけるエッケルトに関わる部分(235~363 頁)である。この研究は、音楽そのものにはほとんど触れていないという弱点を除けば、優れた労作ではあるが、刊行以来 20 年が経過し、当時存在しなかったデータベースの調査の可能性、電子化による史料のアクセシビリティの向上、そして以下にも述べる様な新しい研究成果と研究活動の蓄積を考えれば、エッケルト研究を新たな段階に引き上げる時期が来たと思われる。

中村理平のエッケルト研究が出版されて以来現れた基礎研究として挙げられるのは、特に以下の様なものである。

日本に関しては、本研究の分担者となる予定でもある塚原康子を中心として行われた、エッケルトには間接的に触れている程度であるが、様々な重要な事実を明らかにした宮内省や軍楽隊関係の日記研究(『プラスバンドの社会史』2001 年、『明治国家と雅楽』2009 年、「海軍軍楽長・吉本光蔵日記の研究」進行中の科研費補助金プロジェクト)と同じくいくつか重要な資料を掘り出した中村洪介の遺作『近代日本洋楽史序説』2003 年等があり、またヘルマン・ゴチェフスキの「保育唱歌と「君が代」のメロディー」(2003 年)でもエッケルトの役割が触れている。そして特に韓国に関しては研究の大きな進展が見られる。イ・ジョンヒによる一次資料に基づいた研究「大韓帝国期軍楽隊考察」(2008 年)とチェ・チャンオンによる、一次資料の厳密な再確認に基づいて、エッケルトの業績にも精細に触れている総括的な「韓国近代音楽史」(2009 年から雑誌に連載、未完)等の成果によって、今まで多くの矛盾疑問点を抱えていた歴史記述が訂正され、しっかりしたベースに基礎付けられるようになった。

くわえて、本研究に関わった関庚燦が軍楽隊と歌曲の関係について、藤井浩基が京城日報の記事に見られるエッケルトの活躍について、ヘルマン・ゴチェフスキと李京粉が『大韓帝国愛国歌』の音楽的背景について、それぞれ以前に知られなかった史料に基づいて研究を進めてきている。

藤井もゴチェフスキもそれぞれ当時の情報の流れを問題にしている。つまり韓日の両方で活躍し、「国歌」という国際的な事業に参加したエッケルトの業績についての情報あるいはその作品自体が日本と韓国の間、またはそこから西洋の国々へどのように伝わっていたか、という問題である。この問題を明らかにするには当時の雑誌や新聞記事をさらに研究する必要があり、それを本研究企画の一つの課題とした。さらに音楽作品自体の分析もエッケルトの業績を評価するために不可欠な作業として、本研究の中心的な目的となった。

## 2. 研究の目的

(a)エッケルトの経歴について、彼が作曲・編曲した、またはその演奏に関わった曲目を体系的に把握することである。この作業は今まで書かれた先行研究の整理から始まるが、同時代の雑誌や新聞にはまだ先行研究で触れていない演奏会プログラム等の様な情報が多く含まれていると考えられるので、こうした資料の体系的な検討と整理がこの研究プロジェクトの重要な

<sup>1</sup> 例えば日本について『日独交流の架け橋を築いた人々』(ベルリン日独センター2005 年)、韓国について Hans-Alexander Kneider: Globetrotter, Abenteurer, Goldgräber (München 2009)。

<sup>2</sup> 例えば日本の音楽において野村光一著『お雇い外国人 音楽』(1971 年)、中村理平『洋楽導入者の軌跡』(1993 年)、ドイツ語圏の音楽家に限った研究として Irene Suchy の博士論文(韓国 1992 年)。韓国についてはその様な研究はまだ存在しない。

<sup>3</sup> 例えば音楽教育の L.W.メーソンにつて Sondra Wieland Howe の博士論文(米国 1988 年)、音楽の R. デイットリヒにつて Hiroko Hirasawa [平沢博子] の博士論文(韓国 1996 年)。

課題であった。その結果を年譜としてまとめた。

(b)作曲・編曲作品の中で楽譜として入手できる作品の音楽分析。

(c)エッケルトが日本と韓国で、そして国境を越えて国際的にどういった人間的ネットワークの中で活躍し、エッケルトの業績がどういう経路で世界に伝わったかを分析する。そこでは特に⑦在日または在韓ドイツ人社会、エッケルトが近い関係を持ったことが知られているフランス人社会、そしてより広く西洋人社会のネットワークとその国際的なコネクションと⑧エッケルトが韓国に移ってから持ち続けた日本人との交際関係に注目したい。その中でエッケルトの私生活にも注目する必要があるだろう。

(d)エッケルトが活躍した様々な勤め先（日本で海軍軍楽隊・音楽取調掛・宮内省・陸軍戸山学校等、韓国では宮廷所属の軍楽隊）での役割を比較研究し、それを日本と韓国の洋楽受容史の中に位置づける。

(e)本研究開始当初はエッケルトが「東京合唱協会」の指揮者とも活躍していたことが知られていなかったが、研究開始間もなくそれに関わる文献を発見し、その役割の解明も本研究の重要な目的の一つとなった。

(f)最終年度にはエッケルトの長女アマーリエの自伝にアクセスが初めて可能になったので、その新しい情報によってそれまでの研究成果を補うことが最終年度の課題となった。

この研究は日韓の研究者ネットワークの中で行われたため、双方の国で研究会等を開くことが、日本から韓国に移ったという特徴を持つエッケルトの独特な生涯にふさわしいアプローチだと思われた。この交流によって、この分野で大変必要な情報交換（今まで日本語でしか発表されていない研究成果が韓国の研究者に知られ、韓国語でしか発表されていない研究成果が日本の研究者に知られる）も保証され、将来の研究者ネットワークにたいしても多大な影響が期待できる。したがって今まで「日本の洋楽受容史」と「韓国の洋楽受容史」としてほとんど交流なく両立していた分野が「独日韓とその三国を超える文化交流のネットワーク」の大きな枠の中に入れられ、「近代東アジアの音楽史」として見えてくるのである。

この「近代東アジアの音楽史」を1900年前後にもっとも象徴的に表している人物はエッケルトである。ついてはこの研究の成果を、エッケルトを中心とした記念行事（展覧会、シンポジウム、演奏会）によって日韓の社会に大きく発信しようと考えている。

### 3. 研究の方法

厳密な史料調査、テキスト分析と音楽分析による研究である。

### 4. 研究成果

研究成果を印刷された報告書にまとめたので、ここにはその書誌情報と目次のみを示す。

#### (1) 書誌情報

平成 26～30 年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書  
近代日韓の洋楽受容史に関する基礎研究  
—お雇い教師フランツ・エッケルトを中心に—  
発行日 2019年3月28日  
編集・発行人 研究代表者 ゴチェフスキ・ヘルマン  
印刷所 双文社印刷

#### (2) 目次

序	3
目次	5
<b>第一部 研究論文・調査報告</b>	7
フランツ・エッケルトの私生活とその家族 Hermann Gottschewski	9
『ヴィルヘルムスハーフェン日報』の1876～1878年の記事に見る ヴィルヘルムスハーフェン第二水兵隊軍楽隊の音楽活動 —フランツ・エッケルトのヴィルヘルムスハーフェン時代の背景— 大角欣矢	43
「音楽取調掛時代文書綴」にみるフランツ・エッケルト 酒井健太郎	77

日本におけるエッケルトの足跡 —明治期の外国人軍楽教師との比較から— 塚原康子	98
旧韓国・朝鮮でのエッケルトと日本人 —工藤武城・忠輔兄弟との接点をさぐる— 藤井浩基	115
<u>第二部 研究ノート・文献紹介</u>	131
エッケルト家における家庭音楽・音楽教育 Hermann Gottschewski	133
ドイツ語の新聞記事を通して見るエッケルトの来日 Hermann Gottschewski	138
プロイセン王国の公文書に見るエッケルトの「プロイセン王立音楽監督」 称号の獲得 Hermann Gottschewski	142
東京合唱協会 Hermann Gottschewski	149
1922年の『東明』紙による「朝鮮洋楽の夢幻的来歴」 金奎道	163
<u>第三部 付録</u>	173
付録1 2016年のエッケルト展の解説パネル(一部)	175
執筆者一覧	191
付録2 エッケルトの家系図	(巻末)

5. 主な発表論文等  
(研究代表者は下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

1. 酒井健太郎、吉原潤「音楽家クラウス・プリングスハイムの晩年の教育活動——田村徹氏へのインタビューをもとに」『音楽芸術運営研究』、査読有、第9巻、2016年、73-80頁
2. 酒井健太郎「フランス・エッケルトがいた頃の文部省音楽取調掛(明治16~19年)——エッケルトの功績を検討するために」『音楽芸術運営研究』、査読有、第9巻、2016年、81-95頁
3. 塚原康子「海軍軍楽長・吉本光蔵と日比谷公園奏楽」『銀座文化研究』、査読無、第10巻、2016年、41-58頁
4. 塚原康子「日露戦争時の海軍軍楽隊—海軍軍楽長・吉本光蔵の明治37・38年日記から—」『東京藝術大学音楽学部紀要』査読有、第40巻、2015年、71-89頁

〔学会発表〕(計9件)

1. 藤井浩基、フランス・エッケルトの最晩年に関する再検討—日本人との接点をさぐる—、2018年度日本音楽教育学会中国四国地区例会、2018年度日本音楽教育学会中国四国地区例会、2019年3月3日、福山市立大学 港町キャンパス(広島県福山市)
2. Hermann Gottschewski、Franz Eckert(1852-1916):A Prussian Provincial Musician and His Lifework in Two East-Asian Capitals, International Musicological Society, 20th Quinquennial Congress(国際学会)、2017年03月23日、Tokyo University of the Arts(東京都台東区上野公園)

3. 大角欣矢、明治後期の新聞・雑誌等に見る「国楽」を巡る議論 ——近代日本の「国楽」に関する包括的歴史研究へ向けた予備的報告——、日本音楽学会第67回全国大会、2016年11月12日、中京大学名古屋キャンパス（愛知県名古屋市）
4. Hermann Gottschewski、Die Entwicklung der modernen Musikforschung und des Faches Musikwissenschaft in Japan: Der Wandel musikwissenschaftlicher Fragestellungen in der ersten Hälfte des 20. Jahrhunderts、XVI. Internationaler Kongress der Gesellschaft für Musikforschung „Wege der Musikwissenschaft“（国際学会）、2016年09月17日、Universität Mainz（ドイツ）
5. Hermann Gottschewski、塚原康子、藤井浩基、大角欣矢、ラウンド・テーブル『資料調査によって見えてくる新しいエッケルト像』、国際シンポジウムと演奏会『フランツ・エッケルトとその時代』、2016年05月28日、東京大学駒場キャンパス（東京都目黒区駒場）
6. Hermann Gottschewski、Allerhand Lustiges aus dem Tokio Gesang-Verein ——1880年代の東京合唱協会から見た在東京ドイツ人の男性社会生活、日本音楽学会第66回全国大会、2015年11月15日、青山学院大学（東京都渋谷区）
7. 大角欣矢、信時潔の最初期の活動とその背景、日本音楽学会第65回全国大会、2014年11月08日、九州大学大橋キャンパス、福岡県福岡市
8. Hermann Gottschewski、ラウンドテーブル『音楽学と数学』（パネリスト）、日本音楽学会第65回全国大会、2014年11月09日、九州大学大橋キャンパス、福岡県福岡市
9. Hermann Gottschewski、How a Sadangpae Song Became the First National Anthem of Korea: Homer B. Hulbert's Transcription of "Param i punda" (1896), its Musicological Background and Historical Significance”、7th World Conference of Korean Studies、2014年11月06日、University of Hawai'i at Mānoa Campus, United States of America

〔図書〕（計3件）

1. Hermann Gottschewski編『平成26～30年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書近代日韓の洋楽受容史に関する基礎研究 ——お雇い教師フランツ・エッケルトを中心に——』、2019年、192頁
2. 藤井浩基『日韓音楽教育関係史研究』、勉誠出版、2017年、336頁
3. Hermann Gottschewski、安田寛、櫻井雅人『仰げば尊し 幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡』、東京堂出版、2015年、386頁

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

「フランツ・エッケルトと日韓の洋楽史」

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/gottschewski/eckert/>（日本語）

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/gottschewski/eckert/de/index.html>（ドイツ語）

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/gottschewski/eckert/en/index.html>（英語）

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/gottschewski/eckert/kr/index.html>（韓国語）

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/gottschewski/eckert/pl/index.html>（ポーランド語）

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 藤井 浩基

ローマ字氏名:(FUJII, Kōki)

所属研究機関名: 島根大学

部局名: 学術研究院教育学系

職名: 教授

研究者番号(8桁): 50322219

研究分担者氏名: 塚原 康子

ローマ字氏名:(TSUKAHARA, Yasuko)

所属研究機関名: 東京藝術大学

部局名: 音楽学部

職名: 教授

研究者番号(8桁): 60202181

研究分担者氏名: 酒井 健太郎  
ローマ字氏名:(SAKAI, Kentarō)  
所属研究機関名: 昭和音楽大学  
部局名: オペラ研究所  
職名: 准教授  
研究者番号(8桁): 60460268

研究分担者氏名: 大角 欣矢  
ローマ字氏名:(ŌSUMI, Kin'ya)  
所属研究機関名: 東京藝術大学  
部局名: 音楽学部  
職名: 教授  
研究者番号(8桁): 90233113

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。